格の階層と修飾の階層

矢　澤　真　人

1　はじめに

1．1　本稿では，語順調査や成分間の意味的連関などを手がかりに，変化他動詞文を中心とした格と連用修飾の階層について考察する。

1．2　従来行われた現代日本語の連用成分の語順に関する考察，例えば，宮島達夫（1962）や佐伯哲夫（1975），北原保雄（1981）などでは，①主として格成分について，②直線的に配列することをもくろんできたようである。これは，逆にいえば，①’連用修飾成分への言及が乏しく，②’逆転しやすいものについて位置付けが難しい，といった問題が残されている。連用修飾成分を対象とした矢澤真人（1983）や野田尚史（1984）などでも，格との関連についての記述は不十分であるし，逆転しやすいものについての配慮は乏しいといわざるを得ない。

格成分と連用修飾成分とに限らず，語順の上で二つの成分が近接して出現すること，また，ある成分と直接関係を構成しない成分とが意味的に連関することなどについては，まだ検討する余地があると思われる。

1．3　本稿では，語順調査の方法として，比較的均等な長さの連用成分をいくつか与えて，それを自然な語順に並び替えるというテストを採用した。このテストは，人工的のきらいはあるものの，要求するタイプのデータが多数集められること，当該の語順データだけでなく，その語順の入れ替わったデータも均一の条件で集められ，逆転の比率も容易に求められることといった利点がある。

このテストの結果を平均的な位置や逆転の可能性などから検討していくと，連用成分にはいくつかの階層があると解釈できる。本稿では，二つの成分が「近接」し「逆転」しやすいことをこの階層の上で説明づけるとともに，連用成分相互の意味的連関についても，この階層構造から解釈することを試みる。

2 語順調査

2．1（調査の方法）

連用成分の相対的な位置関係を得るため，次のようなテストを試みた。

調査の被験者は，大学生・短大生の1・2年次，延べ400余名，日本語学専攻者も数名含まれるが，大多数が日本語学の専門的な知識を持たない学生（農学，生物学，工学，体育学などのほか，短大の国文学科や秘書科）である。

調査1では，「割ったんだってさ」という述語とそれにかかる9つの連用成分を与え，この9つの連用成分の中から任意の4つを選んで，それを自分がもっとも自然だと思われる語順に並び換える（もし，一通りでないと考えられるならば，複数解答してよい）というテストを試みた。[1] また，異なったクラスで，調査Ⅱ（「運んだんだってさ」という述語と9つの連用成分）と調査Ⅲ（「打ち明けたんだってさ」という述語と7つの連用成分）を同様の方式で行った。[2]

解答は，例えば，調査Ⅰで，「太郎が」（1）・「皿を」（3）・「庭で」（4）・「昨日」（7）の4つの成分を選び，それを「昨日太郎が庭で皿を割ったんだってさ」と「昨日庭で太郎が皿を割ったんだってさ」の二通りに並び替えたとすると，「7143」と「7413」という4桁の数字二つで答えることになる。異なったセット（先の例でいえば，1・3・4・7以外の組合わせ）で繰り返し試みるよう指示したので，一人につき二つ以上解答を得ている。[3] このようにして得られた解答から，それぞれの連用成分の平均的な位置，二つの成分の相対的な距離と出現の割合を求めた。

位置	連用成分aがその列の中の何番目に現われるか（例 abcd；1, bcad；3）
平均位置	aの位置の平均（1≦平均位置≦4）
配列度	(平均位置-1)/3＊100（0≦配列度≦100） 平均位置を0から100までの数値に直したもの
出現の割合	連用成分aと連用成分bとがともに表れる解答のうちで，相対的にaがbより前にあるものの割合。50%が最も逆転の割合が高い。 （例 abcd, bcad, cabd, acdb とすると，全例中，aがbよ

り前にあるものが3例なので，abの割合は75%となる。

平均距離　aの位置とbの位置との差。平均（1≦平均距離≦3）

（例 abcd, bcad, cabd, acbd とすると，それぞれaとbとの位置の差は1, 2, 1, 3なので，abの平均距離は（1+2+1+3)/4=1.75 となる。）

近接度　(距離−1)/2*100（0≦近接度≦100）

平均距離を0から100までの数値に直したもの

表1

	調査Ⅰ	調査Ⅱ	調査Ⅲ
述語	割ったんだってさ	運んだんだってさ	打ち明けたんだってさ
連用成分1	太郎が	太郎が	太郎が
連用成分2	おもいっきり	ゆっくりと	こっそりと
連用成分3	皿を	荷物を	秘密を
連用成分4	庭で	工場で	公園で
連用成分5	金槌で	フォークリフトで	—
連用成分6	花子と	花子と	—
連用成分7	昨日	昨日	昨日
連用成分8	粉々に	倉庫に	花子に
連用成分9	ねえねえ	ねえねえ	ねえねえ
解答数	718	255	160
実施年度	90, 91	91	91

2．2（結果）　調査Ⅰから調査Ⅲまでの結果は，以下の表のようにまとめられる。テストの段階では，調査Ⅰと調査Ⅱの連用成分6について，「花子と太郎が」のように主格の並立成分となるものと「太郎が花子と」のように共格となるものとは，区別しなかったが，以下の集計では前者を除いてある。[4]

各表のaでは，各成分の出現総数，平均位置，配列度のほか，平均位置で先頭にくるものと末尾にくるものとの近接度，主格・目的格との近接度とそれぞれに後続する場合の出現の割合を示す。また，各表のbでは各成分の相互の逆

表2 a　語順調査Ⅰ　用例数＝643

番号	要素	総数	平均位置	配列度	近接度 9x	近接度 x8	対主格 x1	対主格 1x	対主格 割合	対目的格 x3	対目的格 3x	対目的格 割合
9	ねえねえ	148	1	0	−	96	11	−	0	78	−	0
7	昨日	301	1.4	13	5	83	3	3	12	67	17	3
1	太郎が	463	1.66	22	12	72	−	−	−	44	25	0.5
6	花子と	170	2.24	41	30	54	−	7	100	21	12	8
4	庭で	263	2.25	42	44	47	2	15	80	24	12	10
5	金槌で	246	2.96	65	61	20	50	28	99	11	2	37
2	おもいっきり	248	3.19	73	75	10	17	44	96	11	11	45
3	皿を	506	3.39	80	78	10	25	44	99	−	−	−
8	粉々に	227	3.91	97	96	−	−	72	100	0	10	86

表3 a　語順調査Ⅱ　用例数＝216

番号	要素	総数	平均位置	配列度	近接度 9x	近接度 x8	対主格 x1	対主格 1x	対主格 割合	対目的格 x3	対目的格 3x	対目的格 割合
9	ねえねえ	48	1	0	−	80	19	−	0	72	−	0
7	昨日	123	1.33	11	9	59	6	10	11	67	25	2
1	太郎が	166	1.74	25	19	46	−	−	−	41	0	1
4	工場で	52	2.42	47	50	40	0	15	72	16	33	8
6	花子と	52	2.52	51	31	46	−	3	100	21	−	0
5	フォークリフトで	81	3	67	50	31	10	37	92	12	11	51
2	ゆっくりと	46	3.3	77	95	18	0	52	96	6	28	67
3	荷物を	178	3.31	77	72	14	0	41	97	−	−	−
8	倉庫に	118	3.53	85	80	−	50	46	99	3	25	65

表4 a　語順調査Ⅲ　用例数＝160

番号	要素	総数	均平位置	配列度	近接度 9x	近接度 x8	対主格 x1	対主格 1x	対主格 割合	対目的格 x3	対目的格 3x	対目的格 割合
9	ねえねえ	33	1	0	−		8	6	12	2	1	0
7	昨日	81	1.31	10	23		8	6	12	83	−	0
1	太郎が	156	1.83	28	23		−	−	−	55	0	0.8
4	公園で	67	2.58	53	70		4	46	61	39	6	18
8	花子に	119	2.84	61	68		0	10	97	17	17	9
2	こっそりと	54	3.2	73	71		−	38	100	2	0	24
3	秘密を	130	3.78	93	97		1	2	99	−	−	−

表２ｂ　序列の割合Ⅰ

後 先	9	7	1	6	4	5	2	3	8
9		59/59 100	88/88 100	33/33 100	42/42 100	37/37 100	48/48 100	95/95 100	42/42 100
7	0/59 0		174/215 81	56/62 90	78/84 93	108/108 100	63/64 98	216/222 97	89/89 100
1	0/88 0	41/215 19		75/75 (100)	134/167 80	153/154 99	145/151 96	393/395 99	144/144 100
6	0/33 0	6/62 10	0/75 (0)		35/66 47	58/62 93	45/48 94	99/107 92	57/57 100
4	0/42 0	6/84 7	33/167 20	31/66 53		27/30 90	109/127 86	174/194 90	79/79 100
5	0/37 0	0/108 0	1/154 1	4/62 7	3/30 10		54/82 66	118/187 63	76/78 97
2	0/48 0	1/64 2	6/151 4	3/48 6	18/127 14	28/82 34		96/175 55	49/49 100
3	0/95 0	6/222 3	2/395 1	8/107 8	20/194 10	69/187 37	79/175 45		125/143 87
8	0/42 0	0/89 0	0/144 0	0/57 0	0/79 0	2/78 3	0/49 0	18/143 13	

表３ｂ　序列の割合Ⅱ

後 先	9	7	1	4	6	5	2	3	8
9		23/23 100	27/27 100	8/8 100	8/8 100	10/10 100	10/10 100	30/30 100	28/28 100
7	0/23 0		78/88 89	27/28 96	22/25 88	32/32 100	13/13 100	98/100 98	59/60 98
1	0/27 0	10/88 11		23/32 72	36/36 (100)	54/59 91	23/24 96	144/146 99	85/86 99
4	0/8 0	1/28 4	9/32 28		9/18 50	9/9 100	12/16 75	32/35 91	10/10 100
6	0/8 0	3/25 12	0/36 (0)	9/18 50		9/12 75	8/9 89	34/34 100	14/14 100
5	0/10 0	0/32 0	5/59 9	0/9 0	3/12 25		17/23 74	29/60 48	27/38 71
2	0/10 0	0/13 0	1/24 4	4/16 25	1/9 11	6/23 26		9/27 33	11/16 69
3	0/30 0	2/100 2	2/146 1	3/35 9	0/34 0	31/60 52	18/27 67		66/102 65
8	0/28 0	1/60 2	1/86 1	0/10 0	0/14 0	11/38 29	5/16 31	36/102 35	

表４ｂ　序列の割合Ⅱ

後 先	9	7	1	4	8	2	3
9		15/15 100	31/31 100	10/10 100	17/17 100	7/7 100	19/19 100
7	0/15 0		68/77 88	21/21 100	52/53 98	15/15 100	61/61 100
1	0/31 0	**9/77** **12**		38/62 61	112/116 97	52/52 100	126/127 99
4	0/10 0	**0/21** **0**	24/62 39		23/40 58	7/16 44	40/49 82
8	0/17 0	**1/53** **2**	4/116 3	17/40 42		29/34 85	87/96 91
2	0/7 0	0/15 0	0/52 0	9/16 56	5/34 15		29/38 76
3	0/19 0	0/61 0	1/127 1	9/49 18	9/96 9	9/38 24	

表２ｃ　近接度１（　）内割合10以下のもの

後 先	9	7	1	6	4	5	2	3	8
9		5	19	30	44	61	75	78	96
7	-		3	22	24	51	55	67	83
1	-	12		7	15	28	44	44	72
6	-	(8)	-		4	23	26	21	54
4	-	(50)	2	10		50	31	24	47
5	-	-	(50)	25	(67)		14	11	20
2	-	(0)	(17)	(50)	22	7		11	10
3	-	(17)	(25)	(12)	12	2	11		10
8	-	(0)	(0)	-	-	(0)	-	0	

表３ｃ　近接度Ⅱ（　）内割合10以下のもの

後 先	9	7	1	4	6	5	2	3	8
9		9	19	50	31	50	95	72	80
7	-		6	26	52	55	54	67	59
1	-	10		15	3	37	52	41	46
4	-	(0)	0		17	56	33	16	40
6	-	0	-	0		17	12	21	46
5	-	-	(10)	-	0		6	12	31
2	-	-	(0)	0	(50)	0		6	18
3	-	(25)	(0)	(33)	-	11	28		14
8	-	(50)	(50)	-	-	14	10	3	

表４ｃ　近接度Ⅲ（　）内割合10以下のもの

後 先	9	7	1	4	8	2	3
9		3	23	70	68	71	97
7	-		8	21	49	70	83
1	-	6		46	10	38	55
4	-	-	4		41	43	39
8	-	(0)	(0)	18		9	17
2	-	-	-	11	20		2
3	-	-	(0)	6	(17)	0	

転の割合を，各表のｃでは相対的な距離をまとめて示す。

２．３（成分間の隔たりと階層）

まず，表２ａと表３ａの配列度，先頭の成分（９）・末尾の成分（８）との近接度に注目してみよう。共格「ート」（６）と場所格「ーデ」（４）が近接して出現しており，様態修飾成分（５）と具格「ーデ」（２）と目的格「ーヲ」（３）も近接している。

ついで，出現の割合に注目すると，共格と場所格は，目的格と逆転する度合いが小さく，逆に様態修飾成分や具格は主格と逆転する度合いが小さいことがわかる。さらに，表Ⅰｂ・表Ⅱｂで，相互の出現の割合をみると，表Ⅰ・Ⅱを通じて逆転の度合いが30パーセント以上（出現の割合が30～70パーセント）あるのが，共格と場所格，様態修飾成分と目的格，目的格と具格の３つである。

このことは，共格と場所格（６と４）の間，具格と様態修飾成分と目的格の間（５と２と３）に大きな隔たりがないことを表すと解釈できよう。これに対し，場所格と具格（４と５）は，配列度の上では隣接していながら，逆転する度合いが小さい。場所格と目的格（４と３），場所格と様態修飾成分（４と２），共格と具格（６と５），共格と様態修飾成分（６と２），共格と目的格（６と３）とをみても，いずれも30パーセント未満である。このほか，表のｂの逆転の割合を縦に見ていっても，やはり，共格・場所格と具格・様態修飾成分・目的格の間に大きな隔たりがあることが知られる。

先頭にくる「呼び掛け語」の「ねえねえ」は全く他の成分と逆転しない。ここにも大きな隔たりが想定できよう。この成分は，調査の便宜上付け加えたものであり，また，時の成分との間に今回の調査では意図的に外した主題やモーダルな成分が入る可能性が高いことなどから，以後の考慮からはずす。

呼び掛け語と時の成分（９と７）の間，場所格と具格（４と５）の間の隔た

りよりは小さいが，時の成分と主格（7と1）の間，主格と共格（1と6）の間，さらには，目的格と結果修飾成分（3と8）の間にも隔たりがあるようである。呼び掛け語／時の成分：主格：場所格・共格／具格・様態修飾成分・目的格：結果修飾成分のように分けることができるだろう。仮に，動詞に近いところから，第1階層，第2階層，……第6階層と呼んでおこう。

表5

第6階層	第5階層	第4階層	第3階層	第2階層	第1階層
呼び掛け語	時の成分	主格	場所格 共格	目的格 具格 様態修飾成分	結果修飾成分

2．4（階層の意味付けと場所のデ格）

さて，それぞれの階層についてみていこう。

まず，問題となるのが，場所を表すデ格の取扱いである。従来，場所のデ格は，「時（いつ）→所（どこで）→主語（だれが）」というように，主格に先行するとみなされてきた。例えば，佐伯哲夫（1975）は，

> まず，成分的条件にもとづく語順傾向では，描写を舞台（time, place）にはじめるか，演技（action）にはじめるかで，それがふたつの系列にわかれる。ひとつは，〈舞台→演技〉の系列であり，他は〈演技〉だけの系列である。
>
> そこで，舞台をしめすものとしてはニ・デ・カラ・ヲをあげることができるが，これらを一括して〈位格〉とよぶことにすれば，
>
> 〈傾向1　位格は他の格のまえにくる。〉　(p 110)

と述べ，また，場所のデ格について，

> ……ガのまえにくるデをしらべてみるとそのほとんど（7/8）が位格のデであり，逆にガのあとにくるデをしらべてみるとそのほとんど（8/11）が具格（「……によって」の意味をもつ）のデである。
>
> (p 111)

と述べている。

ところが，先の語順調査では，主格がデ格に先んじる傾向が強く，この間に隔たりを想定できそうな数値も出てきたのである。これは，どのように考えればよいのか。

これについて，次のような解釈をしておこう。

佐伯は，「〈舞台→演技〉の系列」と「〈演技〉だけの系列」との「ふたつの系列」を想定するが，これをいささか修正して，出来事（event）の存在・生起を描写するもの（出来事描写）とある動作主体の動き（action）を描写するもの（動き描写）との二つを想定するのである。この「出来事描写」は，佐伯の〈舞台→演技〉に相当するが，むしろ，〈場面限定→出来事〉といった構成をなすと考えられる。ここでの「だれが」は，場面を限定するための「いつ・どこで」といった成分と並べられるのではなく，「出来事」を構成する成分となっているのである。

これに対し，「動作描写」の場合は，〈動作主体→動き〉の構成をなす。ここでの場所のデ格は，場面の限定と言うよりも，動作・作用の行われる場（〈動きの場〉）を表して，動きを構成する成分となっていると考えるのである。つまり，場所のデ格を常に「舞台」に関わるものとみなすのではなく，時の成分とともに〈出来事〉に先行する〈場面限定〉の成分と，〈動き〉を構成する〈動きの場〉の成分とを区別しようというのである。

報道文や小説などでは，個々の事実や事件を伝えたり，それらをつらねて筋をはこぶため，「出来事描写」が多くなり，本稿のようなテストでは，被験者は（たぶん主格が選択肢の先頭にあることも手伝って）動作主体を中心とした「動き描写」をなしたと考えれば，先行研究と本稿の結果との間をつなぐことができる。

この仮説を支持する現象として，主格をはさむ場所のデ格は重複が許されるということがある。次の（1）や（2）のように，主格の前後に場所のデ格が現れると，それぞれ〈場面限定〉と〈動きの場〉と解釈されるため，さほど不自然にはならない。しかし，（3）や（4）のように，同じ位置に場所のデ格が複数表れると格の重複とみなされ，受容度が下がるのである。

(1)　昨年の二月，東京文京区で歩行中の若者が路上で現金を拾った
(2)　クリスマスイブに全国で若者たちが路上でダンスパーティーを開いた
(3)？クリスマスイブに全国で路上で若者たちがダンスパーティーを開いた
(4)？クリスマスイブに若者たちが全国で路上でダンスパーティーを開いた

つまり，先に述べた1と6（4）との小さな隔たりは，〈動作主体〉と〈動き〉との区切りを表すのであり，こうして作られた〈出来事〉と〈場面限定〉

との区切りが先の7と1との隔たりとなって示されているのである。[51]

(5)　第5階層　　第4階層　　第3階層

〈場面限定〉→〈出来事〉

デ格　　主格　　デ格

〈動作主体〉→〈動き：動きの場〉

2．5（場所のニ格と相手のニ格）

次に，着点のニ格と相手のニ格の位置について見ていこう。

調査Ⅱと調査Ⅲはまだ例が少なく，参考程度にしかならないが，着点のニ格は，配列度の上から見ると結果修飾成分の「粉々に」と同様に，末尾に置かれる度合いが高いが，それよりは，第2階層の諸成分と逆転する度合いが大きい。そこで，着点のニ格は，第1階層の第2階層寄りに位置するとみなせそうである。これに対し，相手のニ格は，場所のデ格と逆転しやすいが，主格と逆転する度合いも，目的格・様態修飾成分と逆転する度合いもともに小さい。これは，第3階層にあるといえるだろう。

場所のニ格には，着点のほか，所動詞などで現れる主格に先行する位格のニ格がある。着点は位置変化動詞の変化対象の後に現れ，位格は所動詞の主格の前に現われるが，次のような変化自動詞文の「ーテイル」形では，両者が接近する。

(6)　道の真ん中に枯れ木が倒れている

(7)　枯れ木が道の真ん中に倒れている

しかし，次のような文では，主格の後に位置すると多少不自然になるようである。

(8)　森の中に枯れ木が倒れている

(9)(？)枯れ木が森の中に倒れている

これは，変化対象の後にくる場所のニ格は変化した位置を表すという読みで解釈されやすいからであろう。つまり，「道の真ん中」は，「倒れる」ことによって「枯れ木」が新たに位置付けられた場所としておかしくないが，もともと「森の中」にあるととられやすい「枯れ木」にとって，「倒れる」ことによって位置付けられる場所として「森の中」はふさわしくないからである。「深い

穴をほる」のような結果目的語を修飾する場合を除くと，多くの場合，動作に関わらない情態（動作以前の情態）は変化対象の連体修飾成分によって表され，動作によって実現された情態は連用修飾成分（結果修飾成分）によって表されることから，(9) の文も，「枯れ木」に場所を表す連体修飾成分をつけて，「森の中」が「枯れ木」の新たに位置付けられた場所であることを示すと，次のように極めて自然になる。

(10)　崖の上の枯れ木が森の中に倒れている

(7) や (10) は，「枯れ木が森の中に倒れる」という位置変化の結果残存の表現と解釈されやすいのに対し，(6) や (8) は，「道の真ん中」や「森の中」に「倒れた木がある」というような，存在の位格文と解釈されやすいのである。

結果修飾成分は，変化の結果，変化主体が帯びる情態を表す成分であり，着点のニ格は，変化の結果，変化対象が位置付けられる場所を表す成分である。ここから，第1階層の意味的な特徴として，〈変化〉が抽出できる。この〈変化〉は，情態や場所が動詞の結果相と結び付けられることによって生じる。変化他動詞の目的格は，この〈変化〉の主体である〈変化主体〉となる一方で，〈動作主体〉の〈動き〉の対象となっている。3と8の間の隔たりは，目的格によって接する〈動き〉と〈変化〉の区切りということができるだろう。

(11)　第4階層　　第3・2階層　　第1階層
〈動作主体〉 → 〈動き：対象〉
主格　　目的格　ニ格　結果修飾成分
〈変化主体〉→〈変化：場所・情態〉

なお，相手と着点は異なった意味役割と考えられながら，これを同時にとる動詞はない。格の形式的な重複が原因でないことは，着点のニ格と相手のト格を表す動詞もないこと，時のニ格や使役・受身のニ格と組み合わされた場合には，ニ格の重複が許されることからも知られよう。

(12)　3月に花子に会います
(13)　夏休みに太郎は花子に京都に行かせた

ニ格によって表される着点や相手の意味役割は，ニ格それ自体で表されるのではなく，それがある階層に現われることで生じると言えるだろう。

2．6 （動きの階層）

では，第2階層と第3階層との間の大きな隔たりはどう考えればよいのだろうか。

どうもここに〈動き〉内部の違いが現われているようである。

ここでは，この二つを，〈動き〉のうち主格のコンディションに関わるものと，〈動き〉そのもの，もしくは目的格のコンディションに関わるものと考えておきたい。

変化他動詞文において目的格で実現される〈変化主体〉→〈変化〉の結び付きは，変化自動詞文においては，主格で実現される。ここで，第2階層に現れるものは，変化他動詞文から変化自動詞文にかえても意味的な関係がかわらないことに注目したい。「対象情態デ」や様態修飾節成分，目的格の共格となるト格などがこれである。目的格の数量を表すものも同様である。

(14) 太郎は花子を裸足で外に出した
(15) 花子が裸足で外に出た
(16) 太郎は荷物をボトリと落とした
(17) 荷物がボトリと落ちた
(18) 太郎が赤い玉を白い玉とぶつけた
(19) 赤い玉が白い玉とぶつかった
(20) 太郎は荷物を3箱外に出した
(21) 荷物が3箱外に出た

具格のデ格は自動詞文だと原因の読みが強くなるが不自然というほどのことはない。

(22) 太郎はエレベーターで花子を下ろした
(23) 花子がエレベーターで下りた
(24) 太郎は石でガラスを割った
(25) ガラスが（太郎の投げた）石で割れた

一方，場所のデ格は，次のような移動変化他動詞文の場合，自動詞文にすると不自然になるようである。

(26)　太郎達は玄関で嫌がる花子達を外に出した
(27)？嫌がる花子達は玄関で外に出た

また，「主体情態デ」や主格の共格を表すト格など，第3階層に現れるものも，そのまま自動詞文にすると，不自然になりやすい。

(28)　太郎は裸足で荷物を外に出した
(29)？荷物が裸足で外に出た
(30)　太郎は花子と荷物を外に出した
(31)？荷物が花子と外に出た

他動的な〈動き〉の，主体が動きを行うに当たっての位置や情態，共同者など第3階層に現れるものは，動作主体の働きかけが対象におよぶコンディションを表すので，動作主体が表示されないと不自然になる。これに対し，第2階層に現われるものは，動きそれ自体のあり方を表わす。しかし，この中でも具格は最も第3階層寄りに出現する。[6]

以上，想定した階層をまとめると，次のようになろう。

表6

第5階層	第4階層	第3階層	第2階層	第1階層
場面限定→出来事				
	動作主 →	動き		
		働き掛け	→ 対象	
			変化主体 →	変化
				場所・情態
	主格		目的格	
場所格		場所格	具格	
時の成分		相手＝格		着点＝格
		共格		
			様態修飾成分	結果修飾成分

3 おわりに

以上，不十分であるが，語順調査から出てきた階層とその意味付けを試みた。今回は，主としてテストに用いた成分を位置付けたにとどまるが，頻度副詞や連続生起を表す連用修飾成分など，他の連用成分についても位置付けていく必要があるし，動詞のいかなる側面と結び付いて，どのような動詞句をつくりあげるかといった点についても，まだ十分に論じていない。いずれも別稿に譲らざるを得ない。

参 考 文 献

佐伯哲夫（1975）『現代日本語の語順』 笠間書院
宮島達夫（1962）「カカリの位置」『計量国語学』 23
北原保雄（1981）『日本語助動詞の研究』 大修館書店
矢澤真人（1983）「情態修飾成分の整理—被修飾成分との呼応及び出現位置からの考察—」『日本語と日本文学』3 （筑波大学）
野田尚史（1984）「副詞の語順」『日本語教育』52

---

1) なお，この調査以前には，当然，連用成分の語順に関わる講義はしていないが，授業進行上，一部のクラスでは述部の助動詞・終助詞の相互承接に関する講義を行った場合がある。

2) これらの成分は，調査Ⅰを施行した最初のクラスで「割ったんだってさ」に係るものをあげさせ，それに呼び掛けの「ねえねえ」を加えたものである。調査Ⅱは，Ⅰの情態変化を位置変化に変えたもの，Ⅲは相手のニ格をとる他動詞にしたものである。「ねえねえ」を加えたのは，これが必ず先頭にくると考えられるためであり，各成分の先頭からの相対的な距離を得ることと，いい加減な解答を削除するためである。各調査でほんの数例，9が先頭にこないものがみられたが，全部，数値から除外した。多くは，3 6 8 9のように，数字のセットをあげただけで組み替えていないと思われるものである。

3) 最高，一人で6つの解答を寄せたものもいるが，解答数を制限せず，そのまま数値に組入れてある。

4) 被験者にこの両者の区別を説明した上でテストを行うことは適当でないと判断したので，特別な指示や説明はせず，集計の際に「6 1」を含むものを除いた。表1の用例数と表2 a，表3 a，表4 aの用例数とが異なるのはこのためである。並立成分を含めた数値は最後に参考として付しておく。

5) 場所のデ格や時の修飾成分のほか，矢澤（1983）や矢澤（1987）などで論じたように「事態存在の修飾成分」なども〈場面限定〉をなすものであり，この第5階層に入れることができよう。

6) このほかいわゆる spray-paint-hypallage は，着点だと成立するが，結果物では不自然だということも第2階層の中核成分である目的格との近接性で説明できよ

う。

i) ペンキで壁を塗る

i)' ペンキを壁に塗る

ii) 粉でダンゴを作る

ii)' ?粉をダンゴに作る

本稿は平成3年度文部省科学研究費奨励（A）「連用関係の階層構造に関する意味構文論的研究」（課題番号0310186）による成果の一部である。

表２ａ’　語順調査Ｉ　用例数＝718

番号	要素	総数	平均位置	配列度	近接度		対主格			対目的格		
					9x	x8	x1	1x	割合	x3	3x	割合
9	ねえねえ	161	1	0		96	25	*	100	80	*	0
7	昨日	326	1.41	14	7	84	8	11	20	67	17	3
1	太郎が	538	1.77	26	25	68	*	*	*	41	25	0.4
6	花子と	254	2	33	25	63	0	7	50	38	12	5
4	庭で	282	2.3	43	44	48	6	14	81	23	12	10
5	金槌で	259	2.98	66	60	20	50	27	99	10	2	37
2	おもいっきり	254	3.2	73	75	10	17	43	96	11	11	55
3	皿を	561	3.42	81	80	9	25	41	96	*	*	*
8	粉々に	246	3.91	97	96		*	68	100	0	9	88

表２ｂ’　序列の割合Ｉ

後 先	9	7	1	6	4	5	2	3	8
9		61/61 100	101/101 100	46/46 100	44/44 100	39/39 100	48/48 100	102/102 100	42/42 100
7	0/61 0		193/240 80	75/87 86	80/86 93	112/112 100	63/64 98	231/237 98	91/91 100
1	0/101 0	47/240 20		75/150 50	150/186 81	165/167 99	151/157 96	448/450 100	163/163 100
6	0/46 0	12/87 14	75/150 50		51/85 60	70/75 93	51/54 94	154/162 95	76/76 100
4	0/44 0	6/86 7	36/186 19	34/85 40		27/30 90	112/130 86	183/204 90	81/81 100
5	0/39 0	0/112 0	2/167 1	5/75 7	3/30 10		54/82 66	122/193 63	77/79 98
2	0/48 0	1/64 2	6/157 4	3/54 6	18/130 14	28/82 34		98/178 55	49/49 100
3	0/102 0	6/237 2	2/450 0	8/162 5	21/204 10	71/193 37	80/178 45		138/157 88
8	0/42 0	0/91 0	0/163 0	0/76 0	0/81 0	2/79 2	0/49 0	19/157 12	

表２ｃ’　近接度Ⅰ（　）内割合10以下のもの

後 先	9	7	1	6	4	5	2	3	8
9		7	25	25	44	60	75	80	96
7	-		8	17	26	52	55	67	84
1	-	11		7	14	27	43	41	68
6	-	29	0		20	30	32	38	63
4	-	(50)	6	9		50	30	23	48
5	-	-	(50)	(20)	67		1	10	20
2	-	(0)	(17)	(50)	22	7		11	10
3	-	(17)	(25)	(12)	12	2	11		9
8	-	-	-	-	-	(0)	-	0	

表３ａ’　語順調査Ⅱ　用例数＝255

番号	要素	総数	平均位置	配列度	近接度		対主格			対目的格		
					9x	x8	x1	1x	割合	x3	3x	割合
9	ねえねえ	59	1	0		82	32	*		74	*	0
7	昨日	134	1.33	11	8	60	11	9	1	69	25	2
1	太郎が	205	1.9	30	32	44				37	17	2
6	花子と	91	2.12	37	21	62	0	3	48	43	0	1
4	工場で	55	2.45	48	56	40	5	14	71	15	33	8
5	フォークリフトで	87	3.01	67	50	30	10	34	92	11	11	49
2	ゆっくりと	48	3.29	76	95	18	0	48	96	5	28	62
3	荷物を	209	3.37	79	74	12	17	37	98			
8	倉庫に	132	3.57	86	82		50	44	99	3	12	35

表３ｂ’ 序列の割合Ⅱ

後 先	9	7	1	6	4	5	2	3	8
9		25/25 100	38/38 100	19/19 100	9/9 100	10/10 100	10/10 100	36/36 100	30/30 100
7	0/25 0		88/99 89	32/36 89	28/29 97	32/32 100	13/13 100	105/107 98	60/61 98
1	0/38 0	11/99 11		36/75 48	25/35 71	60/65 92	25/26 96	174/177 98	99/100 99
6	0/19 0	4/36 11	39/75 52		11/21 52	15/18 83	10/11 91	64/65 99	28/28 100
4	0/9 0	1/29 3	10/35 29	10/21 48		9/9 100	12/16 75	33/36 92	10/10 100
5	0/10 0	0/32 0	5/65 8	3/18 17	0/9 0		17/23 74	33/65 51	28/39 72
2	0/10 0	0/13 0	1/26 4	1/11 9	4/16 25	6/23 26		11/29 38	11/16 69
3	0/36 0	2/107 2	3/177 2	1/65 1	3/36 8	32/65 49	18/29 62		73/112 65
8	0/30 0	1/61 2	1/100 1	0/28 0	0/10 0	11/39 28	5/16 31	39/112 35	

表３ｃ’ 近接度Ⅱ（ ）内割合10以下のもの

後 先	9	7	1	6	4	5	2	3	8
9		8	32	21	56	50	95	74	82
7	-		11	38	25	55	54	69	60
1	-	9		3	14	34	48	37	44
6	-	12	0		9	33	20	43	62
4	-	(0)	5	15		56	33	15	40
5	-	-	(10)	0	-		6	11	30
2	-	-	(0)	(50)	0	0		5	18
3	-	(25)	(17)	(0)	(33)	11	28		12
8	-	(50)	(50)	-	-	14	10	3	